

9) タイワンハブ駆除技術開発

岡 慎一郎¹

キーワード：特定外来生物 侵入防止柵 疑似餌トラップ IoT化 在来種捕食

1. はじめに

タイワンハブは台湾および中国南部、インドシナ半島北部などに広範囲に生息する有毒ヘビの1種であり、特定外来生物に指定されている。沖縄県内では、平成5年に名護市での定着が確認されて以降、分布域は拡大しており、外来種対策や公衆衛生上の観点から生息数を減少させる必要がある。そこで本事業では、タイワンハブの効率的な駆除技術を開発するとともに、海洋博公園や世界自然遺産となったやんばる地域への本種の侵入防止、駆除等の実践的取り組みも展開する。

2. 疑似餌トラップの開発とIoT化の検討

ハブ捕獲トラップの誘因用の餌としては、生きたハツカネズミが使用されている。しかし、ネズミの管理およびトラップの見回りに多くの労力が必要であるとともに、近年社会的にも関心が高まっている動物愛護の視点からも問題がある。そこで、ハブ類が獲物の特定に使用する嗅覚と温感に着目し、人工の誘引餌（疑似餌）の開発を試みている（写真-1）。

昨年度から、ソーラーシステムを搭載した動く熱源を捕獲罠に組み込み、野外での捕獲作業に実装した試験を行っている。本年度は大幅にトラップ数を増やした試験を行った（昨年度13基に対し本年度は28基）。しかしながら本年度の捕獲数はわずか1個体と捕獲効率は低く、疑似餌の仕組みを大幅に見直す必要があると判断している。疑似餌の仕組みについては、現在環境省などとも議論を重ねており、効率的な人工餌の開発を目指している。

また、世界自然遺産推進共同企業体に参画する企業とともに、通信機能と自動識別機能を備えた仕組みも開発中である。試行は昨年度から続けており、本年度はより広い範囲での展開に向けた各種試行を行った。今後、これらの仕組みが洗練させ、タイワンハブ駆除に大きな革新を起こすDX化を目指している。



写真-1 機械化トラップ設置状況

3. 外部評価委員会コメント

外来種タイワンハブの問題は早めに対応を検討する体制を構築する必要がある。その意味では予算や担当者が少なすぎる。毒ヘビである問題は大変であるが、なんとかそこを乗り越えてほしい。（亀崎顧問：岡山理科大学教授）

¹動物研究室